

当初計画の「平塚へのアクセス」については、慶応大学湘南藤沢キャンパス・相模線倉見駅を経て東海道線平塚駅への延伸計画として動いているようである。

<2> 横浜市営地下鉄

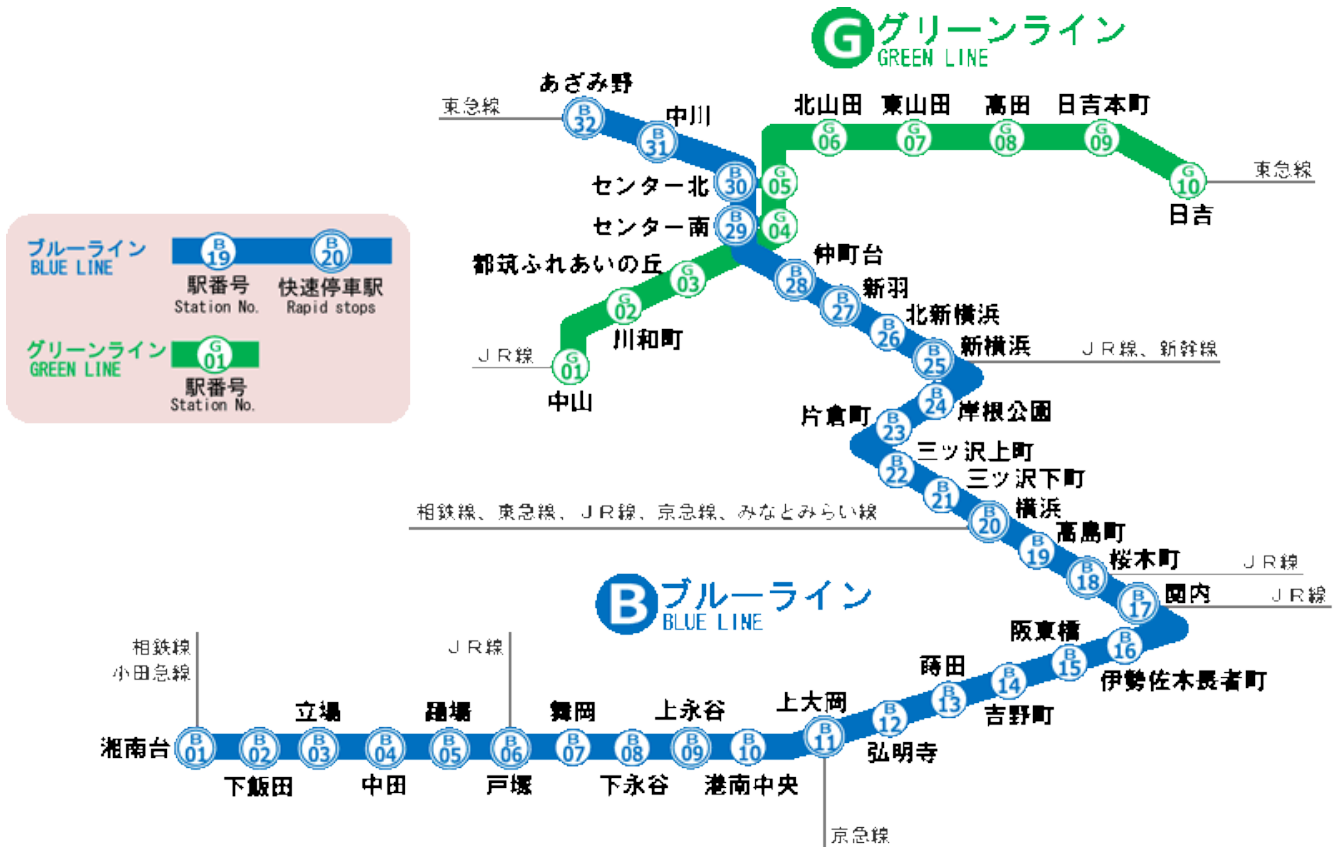
横浜市営地下鉄は、全国でも珍しいカタカナ（横文字）の路線名になっている。

グリーンラインは、東横線の日吉駅と横浜線の中山駅を結ぶ 13Km の路線。鶴見～日吉～中山～二俣川～戸塚～根岸～元町中華街を結ぶ環状鉄道の計画があったようだが、今どんな状況になっているのかは、確認できていない。

ブルーラインは、田園都市線のあざみ野駅と小田急江ノ島線の湘南台駅を結び、「くの字」を裏返しにした様に走る路線で路線距離は 40Km。北端のあざみ野駅から小田急線の新百合ヶ丘駅（川崎市）までの延伸計画がすでに動いており、2030 年開業を予定しているらしい。

いずれの路線も、横浜市の郊外に広がる鉄道と無縁の地域を開発するにあたって、基盤整備を並走させた結果の産物で、利便性が向上した代わりに自然景観が失われることにもなったと思う。

山は削られたり山の上まで家が建ち並んだり、川は蓋がされて見えなくなったり、様々な変化がうかがえる。これをもって「近代化の功罪」とでも言うのだろうか、「航空写真で見る横浜市の変遷は驚愕に値する」とまで言っては在住の方々に失礼にあたるかもしれないが……。



<3> 相鉄いずみ野線の旅

3月18日、横浜駅に10時過ぎに到着。まだ通勤時間帯が終わっていないようで、相鉄ホームへの乗換え通路は人の流れで満杯、流れに逆行して歩くのは大変な状況。10時11分発各駅停車湘南台行に乗車。

平沼橋・西横浜・天王町と暫くは町中の喧噪を走り、駅間距離も短く路面電車か軽便鉄道を思わせる。安政6年（1859年）横浜港開港の際に、東海道と横浜港を結ぶ道路として架けられた橋のひとつが平沼橋。その後何度か架け替えられたため、昔の橋は残っていないらしい。帷子川の河口の入江だったこの地を、天保年間に程ヶ谷宿の豪商平沼九兵衛が岡野某の協力を得て大規模な埋立てをして、平沼新田・岡野新田と名付けたのが地名「平沼」の由来。

天王町は、この地にある橋樹神社（たちばなじんじゃ）に由来している。文治2年（1186年）創建の祇

園社で、京都八坂神社の分霊を祀っている神社だが、後に牛頭天王社→天王宮→橘樹社と名を変えて橘樹神社となった。神社は天王町駅の北側、帷子川北岸の旧東海道沿いにある。

星川という現代的な地名が気になったが、実はれっきとした「由緒ある地名」だということがわかった。平安時代の文献にも見られ、「松や杉の木立で鬱蒼としており、川面に星空を映した」ことに由来すると言われている。星川村を流れる川は前述の帷子川、このあたりに鬱蒼とした林があったと思いながら車窓の景色を眺めるのも一興。

和田町までの駅のプラットホームは、どの駅も同じデザインで面白味がない。徐々に線路際まで建物が迫り、さらに遠くの小山の上まで住宅地が広がるようになると**上星川**。

西谷（にしや）とは、「山の西側の谷」を意味する言葉なので、帷子川の北岸を探してみると数本の支流が流れ込んでいる。恐らく、大規模な開発が行われる前の帷子川の岸边には山が迫っていて、その山の西側に刻まれた谷が地名の由来なのかもしれない。帷子川の岸边に並ぶ町の名は川辺町・星川・川島町など水辺の地名、少し川の流れから離れると峰岡・釜台・坂本などの丘の地名、小山が広がっていたと思われる高台の窪みには羽沢・岡沢・鎌谷・西谷など谷間の地名。

鶴ヶ峰という地名の由来が気になっていた。鶴が飛来するのは谷津田や湿原なので、「鶴の峰」とは？

「鶴が飛来した」という説と、「ツル（水の流れ）を意味する」という二つの由來說があるらしい。鶴飛來說によれば、帷子川北岸に鶴が羽を下ろす山があったらしいが、都市開発によって早い時期に山は消えてしまった。いずれにせよ、「鶴峰」という地名は、鎌倉時代の文献にも出ているらしい。

二俣川まで来ると、巨大なマンションが建ったり住宅地が隙間もなく詰まっていたりで、とても地面など見えやしない状態になってくる。駅の名から、「川が二又になっている」地点つまり帷子川の支流が合流する所があるのではないかと想像して地図を眺めて見たら、川の合流地点がいくつか見つかった。さて、ここまでは「旅の入口」であって、ここからが「いずみ野線の旅 本番」。

二俣川を出ると、いずみ野線は丹沢の山脈を正面に見ながら左に大きくカーブして南に向かうが、すぐにトンネルに入ってしまう。東海道新幹線の下をくぐり抜けると切り通しのような溝の中を走るため周囲の景色は楽しめない。

がっかりしている内に次の停車駅**南万騎が原**に到着。昭和38年（1963年）に二俣川町の一部と小高町の一部を合わせて万騎が原町が出来た。平安時代に「牧」があったこと、畠山重忠が北条氏の万騎兵に敗れた終焉の地であることからこの町名となったらしい。もっと深い歴史を想像していたので、やや落胆は隠せない。

山ひとつをゴルフ場にしてしまったような戸塚カントリークラブの西側を、しかも住宅地の真下をトンネルで潜り抜けると**緑園都市**駅に入る。

再びトンネルに入った電車が、地上に現れるや境川を渡って**弥生台**駅に入る。トンネルと切り通しを抜ける度に、新しく作られた町並みが顔を出す。もはや車窓を楽しむ旅ではなくなってきた。

相模野台地が切り崩されて、新しい宅地が開発された。台地にあるいくつかの湧水と川の流れとが、削り取られた後に「いずみ野」という名で残った。そして、開発途上で発掘された弥生式土器から弥生台という地名が誕生した。かなりの古い地名や地形は消えてしまって、風変わりな新しい地名に置き換わってしまった。近代国家が造成されるにあたり、長い長い歴史が犠牲になったようで哀れな感じもする。鎌倉往還の下を潜り抜けると僅かな駅間距離で**いずみ野**。

現在のいずみ中央駅（次の駅）の東側にある長福寺・須賀神社は、北条氏によって滅ぼされた泉親衛（いずみちかひら）ゆかりの寺社であり、その隣の和泉中央公園の湧水が昔この地を「泉」と言った由来に繋がっているらしい。横浜市南西部の相模野台地は、縄文時代の遺跡が発掘された場所や、弥生時代の遺跡が発掘された場所が多く、境川・和泉川・阿久和川・宇田川などの河が流れており、台地の縁には湧水も数多く、農耕を中心とした暮らしが営まれてきたことが想像できる。近頃平仮名の地名が増えているが、その理由が解らない。「泉」または「和泉」ではなぜいけなかったのだろうか？

いずみ野駅の駅名表示板に付記されている中国語の駅名表示「泉野」が滑稽な感じがした。

車窓の景色を見ても、地名の由来を想像してみてもあまり興味が湧いてこないいずみ野線。少々投げや

りな気分になっていたら、いずみ野駅を出た途端に高架線を走るようになり、右手に真っ白な富士山が登場。

いずみ中央駅まで来ると、丹沢山塊もすべて姿を表し、百点満点の景観。諦めかけていた「車窓の旅」は再び盛り上がりを見せてくれて、聞くに堪えない浮薄な駅名ゆめが丘も気にならずに、終点の湘南台駅に到着。



<4> ブルーラインの旅

次の目的地は関内駅、旧友と待ち合わせをして昼食会をすることになっている。

湘南台駅の地下には、巨大なコンコースがある。小田急線と相鉄と地下鉄とを結ぶのに通路が必要な感じはするが、これほど広い地下道が必要なのだろうか。そのだだっ広いコンコースの末端に市営地下鉄の乗り場があった。

何とも面白味のないいずみ野線の旅だったが、市営地下鉄ブルーラインで気分は持ち直した。

地下鉄なので、外の景色が見えることは期待していないが、改札口付近に掲示されている路線図を見て、只ならぬものを感じた。相鉄いずみ野線とは全く異なり、「由来を知りたくなるような駅名」がいくつも並んでいる。

湘南台を出ると、暫くは相鉄いずみ野線と並走するが、北へ走るいずみ野線から離れて北東へ向かうと下飯田駅。明治に入り、相模国鎌倉郡の中田・和泉・上飯田・下飯田が合体して村となり、それぞれの地名から文字を集めて中和田村ができた。中和田村のほぼ全域が現在の泉区になるとのこと。いずみ野線のゆめが丘駅を挟んで、北にあるのが上飯田町、南にあるのが下飯田町、それぞれ歴史の面影を残してはいるようだ。

立場（たてば）は、長後街道の立場（休憩所）があった所らしいが、町の名前としては残っていない。この地に限らず、昔は各地に「お茶立場（おちゃたてば）」と言われる所があったようだ。

中田も下飯田と同様に、昔からある村の名前が残されている。

踊場は、またたびを食べた三匹の猫が踊っていたという伝説から生まれた地名と言う説と、「猫の踊場伝説」とがあるらしい。「猫の踊場伝説」は、東海道戸塚宿の醤油屋で丁稚の手ぬぐいを洗って干しておくで無くなってしまふ。人気の無い空き地で、手ぬぐいをかぶった猫が集まって踊りを踊っているではないか。そして、この踊りの音頭をとる役をしていたのが、醤油屋の飼い猫の黒いトラだった。

踊っていた場所は、現在の踊場駅のあたりで、戸塚駅から 1.6Km 程離れている。

戸塚は東海道の宿場町。さらに歴史を遡ると、「平安時代に戸塚修六郎友晴とその子孫が切り拓いたことからこの地名が付いた」と富塚（とみづか）八幡宮の縁起に記されているとのこと。一方ではこの「富塚」こそが戸塚の地名の由来であるという説もあるという。

舞岡は、昭和 60 年頃に我が社のコンピューターユーザーだった株式会社ニフコの本社があり、何度か訪問したことがある。まだ地下鉄など走っていない頃なので、戸塚駅からタクシーに乗ったように覚えている。その昔、「白旗が宙に舞う」という吉事があったことを機に石清水八幡宮を勧請して舞岡八幡宮が建立されたという言い伝えがある。八幡宮は舞岡駅の南 300m ほどの所にある。

下永谷は、日限山（ひぎりやま）の北側に位置し平戸永谷川の下流にあたる。上永谷は南側に位置しその上流にあたる。日限山一帯は宅地開発により海拔 50m 台の丘のようになってしまったが、その昔は真言宗八木山福德院があり横浜の高野山と言われる仙境だったようだ。「日限山に刻まれた長い谷」が永谷という地名の由来ではないかと思う。

港南中央という駅名も味がないなと思って地図を見たら、町の名前が港南区港南で、港南区役所があるから「港南の中央」だと言うことなのだろう。港南台・洋光台が誕生する前にこの地に付いていた名前を活かすことが出来なかったのだろうか。

上大岡は何となく地形を思い浮かべられそうな駅名だ。京急上大岡駅と駅前を流れる大岡川、東側の高台には久良岐（くらき）公園がある。続日本紀に「武蔵国久良郡で白い雉子を捕らえて朝廷に献上」の

記述が残されているようだ。久良岐郡大岡村・久良岐郡大岡川村などの呼称の変遷の後、横浜市になったのは昭和2年（1927年）。

弘明寺は弘明寺観音（真言宗瑞鷹山蓮華院弘明寺）があることによる地名で、この辺りは江戸時代には弘明寺村と言った。現在は南区弘明寺町として地名が受け継がれている。養老5年（721年）にインドの僧善無畏が結界し、天平9年（737年）に行基が観音像を刻んで堂宇を建てたとの言い伝えがある横浜最古の寺。寺は京急弘明寺駅の東隣にあり、ブルーラインの弘明寺駅からは大岡川を渡って西へ600m位歩かなければならない。

蒔田（まいた）、農耕が行われていた民の暮らしが想像できる地名だが……。室町時代には蒔田郷の彦四郎という人が年貢を納めた記録が文献に残っていたので、その時代には農地であったことは間違いなさそうだ。16世紀に吉良氏の居城である蒔田城があったという情報もあり、江戸時代には久良岐郡蒔田村と言ったようである。肝心の「地名の由来」は、「田に種を蒔いた」農法から来たものとする説と、更級日記の一節にある明田河（あすだがわ）は大岡川の下流を指す古名であることから、これが「めいた」と読まれ、さらに「まいた」に転じたという説もあるらしい。

吉野町、明暦年間に吉田勘兵衛が中心になって大岡川の河口を埋め立てて新田開発をした。吉田新田と名付けられ、碁盤の目のように区画割されて番号が振られて、鎮守社として「お三の宮日枝神社」も設置された。吉野町は新田の一番奥にあるお三の宮の東側に位置する。

阪東橋というスケールの大きい名前が気になって調べてみたが、由来はわからなかった。

伊勢佐木長者町は、伊勢佐木町と長者町の二つの町の顔を立てて付けられた、近頃流行りの「民主的な」駅名。伊勢佐木町（いせざきちょう）は、昔は「いせざきちょう」と言われたらしい。道路建設費用を寄付した三名の名前から文字を頂いた（伊勢屋・佐川・佐々木）とする説と、興行場を開設した二名の名前から文字を頂いた（伊勢・佐々木）とする説があるとのこと。どちらの説が正しいにせよ明治に入ってからのことなのに何故はっきりしないのかな、とやや気になるところでもある。

関内という地名の由来は開港の歴史に遡る。アメリカに開港を要求された江戸幕府が、神奈川宿の隣の横浜村に港を作ったが、神奈川宿に外国人を入れないために関門を設けて、関門の港側を「関内」、陸側を「関外」と言った。堀割を開削し、橋を架け、関門を設けて、外国人居留地を区分したり、様々な知恵を絞った横浜開港の歴史は興味深い。

ブルーラインはさらに北上してあざみ野駅を目指すのだが、今回の旅は関内駅で下車して終了。

快晴でやや気温も高めな一日、横浜の街を散策するには最適な日。次の行事予定として、数年ぶりで再会する旧友との昼食雑談会と散策が控えている。

「観光地ではない横浜」を斜めに見ながら通り過ぎた「不思議な旅」の一日。

以上